

# 旧海軍航空基地・大社基地遺跡群

【島根県出雲市斐川町】

大社基地遺跡群は、第二次世界大戦の末期に旧日本海軍が建設した航空基地遺跡群である。

満州事変、日中戦争と中国大陸で戦争を続けていた日本は、1941年（昭和16）12月、マレーシアのコタバルに上陸（対英）、その1時間後には真珠湾を攻撃し（対米）、第二次世界大戦に突入した。

緒戦では優勢に戦争を進めた日本軍だったが、1942年（昭和17）6月のミッドウェー海戦以降戦況は悪化し、1944年（昭和19）7月にサイパン島などがアメリカ軍に占領されると本土爆撃も本格化する。また1945年（昭和20）3月以降は、沖縄戦に参加するために日本軍航空部隊が集結していた九州各地の航空基地が繰り返し空襲を受ける<sup>1</sup>。このように戦況が悪化し、既存の航空基地が壊滅していく中で、本土決戦を目前に控えて航空部隊を再編成する必要に迫られ、空襲が比較的少ないと想定された現在の島根県出雲市斐川町内に新設された航空基地が大社基地であった<sup>2</sup>。

建設場所に選ばれたのは、すでに廃川となっていた「新川」の河川敷を中心とする一帯であった。「新川」は、天井川で頻繁に洪水災害を起こしていた斐伊川の水を宍道湖に流すため、松江藩が1831年（天保2）に開削した放水路だった。しかし「新川」自身も天井川となって周辺に洪水災害が及ぶようになり、斐伊川の取水口を止めて1939年（昭和14）に廃川となった。そのためここには、人工的に開削された最高幅135間（約245m）で直線的に連なる平坦な土地が残されていた<sup>3</sup>。この平坦地を滑走路用地として容易に確保できたことと、複雑に谷が入り組む周辺の地形が、本土決戦を見据えたこの段階での基地には適していたと考えられたのであろう。

旧海軍はここに「第一新川基地」と「第二新川基地」の二つの航空基地を建設した（同年6月後半以降、基地の名称はそれぞれ「大社基地」「直江基地」に変更され、滑走路は、大社基地に「主滑走路」、直江基地に「応急離陸場」が建設された<sup>4</sup>）。大社基地の「主滑走路」の建設工事は、1945年（昭和20）3月から6月にかけて、舞鶴鎮守府から派遣された第338設営隊、鳥取県米子市にあった海軍航空基地・美保基地の予科練練習生、及び地元の国民学校学童まで動員して突貫工事で行われた。6月8日には「竣工式」が行われたが、実際の運用は5月中には始まっている。一方で「直江基地」には、「牧場計画」といわれる練習機を用いた特攻のための「応急離陸場」が建設されたが、実用化には至らなかった<sup>5</sup>。

「主滑走路」の規模は、全体が幅120m、長さ1,700mで、このうち幅60m、長さ1,500mがコンクリート舗装され、コンクリート舗装の両側には各30mの幅で碎石を敷いた緩衝帯が設けられていた<sup>6</sup>。滑走路の基礎は、動員された学童が草の根を抜いた川原に、現在の岡山県新見市石蟹で採掘した碎石や米子市日野川で採取した栗石などの石材を敷き詰め、それを転圧して造成された<sup>7</sup>。ここに5m×10mの型枠1,800枚を設け、厚さ約10cmのコンクリートを打設する型枠工法で路盤を作ったのである。また、石材を運び込むために、近隣の一畑電気鉄道からレールを取り外し、山陰本線の直江駅周辺から滑走路まで引き込み線も作られた<sup>8</sup>。

このコンクリート舗装の「主滑走路」のうち、幅約60m、長さ約600m以上が現存している。当時の陸海軍は全国に約250カ所の航空基地を建設したと言われているが<sup>9</sup>、実戦で用いられたコンクリート滑走路を大社基地と同程度の規模で残すのは、ほかには兵庫県加西市の姫路基地（鶉野飛行場）のみと言ってもよい<sup>10</sup>。例えば日本海側の航空基地としては石川県小松基地、京都府峰山基地、鳥取県美保基地が知られているが、小松基地や美保基地の滑走路は戦後の空港建設時に改変され、峰山基地の滑走路は開発によってほとんど消滅した。このように航空基地の滑走路は、戦後の経済成長の中で住宅地等になるか、あるいは民間空港や航空自衛隊基地などに姿を変えているのが現状であり、現在でも滑走路として使われているものも、現代

の旅客機やジェット機に適した、航空法の安全基準を満たした滑走路路盤に改修されている。

大社基地の「主滑走路」は、空襲を避けるために一時的に航空機を飛来させる退避用、九州や太平洋沿岸の制空権を奪われる中で夜間攻撃などの訓練を行うための訓練用、あるいは偵察用としても使われたが、6月末には第762海軍航空隊司令部と攻撃第501飛行隊が宮崎航空基地から移駐した<sup>11</sup>。この部隊は、日本海軍の主力重爆撃機「銀河」約40機を再結集して編成した部隊で、この段階では西日本最大級の爆撃機部隊であり、大社基地も日本有数の爆撃機基地となった<sup>12</sup>。そして配備された「銀河」は「主滑走路」を使って実戦に出撃した<sup>13</sup>。姫路基地（鶉野飛行場）は姫路空襲が激化する5月に閉隊することから、大社基地の「主滑走路」は、現存するものとしては、第二次世界大戦の最後に使われた滑走路である。

「主滑走路」の周辺には、自然地形を利用し、谷ごとに大社基地に関連する施設が置かれ、その遺構は現在でも残されている。後谷には第762海軍航空隊司令官が本部を置いた民家が現存し、その周辺には「通信壕」と呼ばれる地下壕など3基（4口）が残る。和西谷にはコンクリート製の入り口を持つ地下壕の「魚雷庫」5基（7口）が残り、奥行が30mに及ぶものもある。そのほか寺谷には「爆弾庫」、鷺谷には「燃料庫」などの地下壕が作られ、現在でも複数残存するほか、仏教山の山麓には、「庁舎」「工業所」「倉庫」などを配置するために建設されていたと思われる未完成の地下壕が相当数残されている<sup>14</sup>。

また「銀河」を格納するために掩体が20カ所建設された<sup>15</sup>。掩体はいずれも山の斜面のくぼみや小さな谷を加工して作られており、幅20m、全長15mの「銀河」をそれぞれ1機から数機格納し、上部は竹や枝木をかぶせて機体を隠匿した。この掩体は、戦後宅地になったところもあるが、現在でも一部が残されている。この掩体と「主滑走路」は、一部を厚板が貼られた幅15mの「誘導路」で結ばれ、「銀河」を移動させる時に使われた<sup>16</sup>。「誘導路」も圃場整備や工場建設によって消滅した部分はあるとはいえ、かつての路線をたどることは可能である。また、このほか5カ所の谷には計25棟の兵舎が建てられたが、その跡地には現在でも一部に平坦面が残されている<sup>17</sup>。高角砲や対空機銃の陣地も7カ所以上あり、一部は発掘調査も行われている<sup>18</sup>。さらに、基地建設部隊であった第338設営隊が本部兼宿舎とした旧出西国民学校も、戦後に改修されてはいるが木造校舎建築物として現存する。また遺構としては残されていないが、「主滑走路」の周辺には人間爆弾「桜花」を格納するための施設があり、敗戦時には約50機が置かれていた<sup>19</sup>。

一方、国立公文書館アジア歴史資料センターの公開資料内には、第338設営隊の戦時日誌など、大社基地遺跡群に関する文献資料が豊富に残されている。これらの文献資料によって、第二次世界大戦末期の日本の軍事体制や海軍航空基地の歴史、大社基地の歴史は一層明らかになると考えられる。またこの地域は、設営隊員や予科練生をはじめ、航空部隊などの数千人の大部隊が突如駐屯し始めた山陰の農村地域であり、学童などが動員されたほか、住民も、労務奉仕や住居・食料の提供など、物心両面にわたって大社基地を支えた。したがって当時を記憶している周辺住民の方も少なくない。今後住民を対象とした聞き取り調査が進むことで、基地の全体像はより具体的に復元できると期待される。

このように大社基地遺跡群は、

- ① “飛行機の戦争”であった第二次世界大戦を象徴する「主滑走路」が大規模に残り、施設の遺構全体も良好に残された国内でも希少な航空基地遺跡群である。
- ② 既存の河川敷を活用して滑走路を急速に建設したこと、「誘導路」がいわゆる「タコの足式」であったこと<sup>20</sup>、関連施設を自然地形を活かして広範囲に分散配置し、しかも多くの地下壕や偽装隠ぺいする掩体を造成するなど、空襲を警戒しつつ本土決戦を実行しようとしていた、戦争最末期の特色を明確に示す航空基地遺跡群である<sup>21</sup>。
- ③ 基地と周辺住民との関係や、基地が周辺住民に与えた影響など、戦時体制の具体的な在り方を知ることのできる貴重な航空基地遺跡群である。

以上のように大社基地遺跡群は、山陰地域にとどまらず、日本の近代の歴史を理解する上で欠くことのでき

ない遺跡であり、第二次世界大戦末期の航空基地の歴史を知る上でも学術的価値の高い遺跡と言える。また、大社基地遺跡群が敗戦の年に突貫工事で建設されて実戦で使われ、そして敗戦を迎えたあわただしい歴史には、東アジアの人々をはじめとして、国内外に莫大な被害や損害をもたらしたこの戦争の結末が集約されている。歴史や記憶を将来の平和学習に活かし、それらを広く世界の人々と共有するためにも、有意義な活用策が期待できる遺跡なのである。

本稿で参考にした国立公文書館アジア歴史資料センターの公開資料は下記の通りである。なお「航空隊引渡目録 1/14」～「同 14/14」のように、全体を参照しているものはその代表的なレファレンスコードをここに掲載している。また、煩雑さを避けるために注では簡略に記している。

- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08030300600、昭和20年3月15日～昭和20年7月31日 第338設営隊戦時日誌(防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08030300700、昭和20年3月15日～昭和20年7月31日 第338設営隊戦時日誌 (防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C13120489000、高知海軍航空隊戦時日誌 第5海軍燃料廠. 第2相模野 山陰. 大津. 九州. 西宮. 三重. 神町. 松島. 豊橋. 宇佐(防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C12070504900、自昭和20年1月. 至昭和20年8月 秘海軍公報(防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C12070505400、自昭和20年1月. 至昭和20年8月 秘海軍公報(防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C19010048800、昭和20年5月～昭和20年7月 参考電綴 1 / 3(防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C12070505900、自昭和20年1月. 至昭和20年8月 秘海軍公報(防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C13120011900、第132海軍航空隊戦闘詳報 昭和19～20年 (202空. 221空. 252空. 652空. 762空. 765空) (防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08011060200、航空隊 引渡目録 1 / 14 (防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08011062200、航空隊 引渡目録 2 / 14 (防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08011064800、航空隊 引渡目録 3 / 14 (防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08011069100、航空隊 引渡目録 4 / 14 (防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08011071700、航空隊 引渡目録 5 / 14 (防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08011074600、航空隊 引渡目録 5 / 14 (防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08011075300、航空隊 引渡目録 6 / 14 (防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08011077100、航空隊 引渡目録 7 / 14 (防衛省防衛研究所)」

所)」

- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08011078800、航空隊 引渡目録 8 / 1 4 (防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08011080200、航空隊 引渡目録 9 / 1 4 (防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08011083300、航空隊 引渡目録 1 0 / 1 4 (防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08011086500、航空隊 引渡目録 1 1 / 1 4 (防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08011088400、航空隊 引渡目録 1 2 / 1 4 (防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08011090400、航空隊 引渡目録 1 3 / 1 4 (防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08011092700、航空隊 引渡目録 1 4 / 1 4 (防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08011096300、航空隊 引渡目録 1 4 / 1 4 (防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08011425200、兵器需品引渡目録(追加) 島根県 (①-引渡目録-487) (防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08011426200、兵器需品引渡目録(追加) 島根県 (①-引渡目録-487) (防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C13120379300、第762海軍航空隊戦時日誌 鹿屋. 美保派遣隊 偵察第11飛行隊 昭19. 11. 1~20. 6. 30(防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C13120003300、戦時日誌(九州. 元山. 佐伯. 第2鹿屋. 762海軍航空隊) 昭和20年(防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C13120003200、戦時日誌(九州. 元山. 佐伯. 第2鹿屋. 762海軍航空隊) 昭和20年(防衛省防衛研究所)」

1 日本本土への空襲については平塚柁緒編著『日本空襲の全貌』洋泉社 2015 参照。特に九州地方の航空基地への空襲については 162~165 頁参照。本書によれば各航空基地への空襲は鹿屋 15 回をはじめ、大分 9 回、国分 9 回、宮崎 8 回、都城 8 回、大刀洗 7 回などに及んだという。大社基地に移駐する第 762 航空隊の前任地宮崎もこのように繰り返し空襲を受けていた。

2 本土決戦については山田朗「本土決戦体制への道」『幻でなかった本土決戦』高文研 1995、同「<本土決戦>とは何であったのか」『本土決戦の虚像と実像』高文研 2011、『戦史叢書 本土決戦準備 1』朝雲新聞社 1971、『同 2』朝雲新聞社 1972 参照。

3 「新川」に関しては池橋達雄編著『莊原歴史物語』130~133 頁参照。

4 大社基地の建設が始まった当初の正式名称(海軍内で公的に用いられた名称)は、「(第一)新川基地」と「第二新川基地」であり、総称は「新川基地」であったと思われる。「(第一)新川基地」は後の「(狭義の)大社基地」で「第二新川基地」は「直江基地」のことである。少なくとも 5 月までの段階では「大社基地」という名称はなかった。このことは C08030300600「第三三八設営隊戦時日誌 自昭和二十年三月十五日 至昭和二十年三月三十一日」(以下「第 338 設営隊戦時日誌(3月)」と呼ぶ)、「第三三八設営隊戦時日誌 自昭和二十年四月一日 至昭和二十年四月三十日」(以下「第 338 設営隊戦時日誌(4月)」と呼ぶ)、C08030300700「第三三八設営隊戦時日誌 自昭和二十年五月一日 至昭和二十年五月三十一日」(以下「第 338 設営隊戦時日誌(5月)」と呼ぶ)、或いは C13120489000「山陰海軍航空隊美保基地戦時日誌

自昭和20年5月1日 至昭和20年5月31日」で「新川基地」という名称が用いられ、「大社基地」とは呼ばれないことから明らかである。また、C12070504900「昭和二十年五月十六日付け 海軍公報第五〇一三三〇」や、C12070505400「昭和二十年六月二十四日付け 海軍公報第五〇五一〇」の公報でも「新川基地」の名称が用いられる。C19010048800「参考電綴1/3」の「新川基地指揮官」から発信された「新川基地現況報告（五月十二日）」でも同様である。したがって大社基地が、少なくとも5月いっぱい、仮称であるにせよ公的には「新川基地」と呼ばれていたことは確かである。

「大社基地」の名前は、C08030300700「第三三八設営隊戦時日誌 自昭和二十年六月一日 至昭和二十年六月三十日」（以下、「第338設営隊戦時日誌（6月）」と呼ぶ）で使われ始めるのが最も早い例だと思われる。C12070505900「昭和二十年八月四日付け 海軍公報 第五〇八九号」の「昭和十八年内令第十一号 航空基地管理ニ関スル件中左ノ通改正」の記載から考えて、1945年7月10日には明らかに「大社基地」に名称を変更している。またC13120011900「第762海軍航空隊戦闘詳報第12号」では、6月16日の電報の発信者は「新川」であったが、6月26日の受信者が「大社」となっている。したがっておそらく6月後半には「大社基地」の名前が用いられるようになったのではないだろうか。

なお本稿に記す「アルファベット+番号」は、すべて国立公文書館アジア歴史資料センターのレファレンスコードである。軍事資料としての資料批判が必要なことは言うまでもないが、これらの資料は基本的に1次資料であり、大社基地を考える上で最も基礎となる資料である。

5 アジア歴史資料センターには、上記の「第三三八設営隊戦時日誌（3月）」、「第三三八設営隊戦時日誌（4月）」、「第三三八設営隊戦時日誌（5月）」、「第三三八設営隊戦時日誌（6月）」、及びC08030300700「第三三八設営隊戦時日誌 自昭和二十年七月一日 至昭和二十年七月三十一日」（以下「第338設営隊戦時日誌（7月）」と呼ぶ）と、5か月分の戦時日誌が残されている。これによって「大社基地」「直江基地」はじめ誘導路や掩体などの建設の過程や人員体制などの7月までの状況については大まかに知ることができる。このほか大社基地建設には第534設営隊も関与していた可能性がある。第534設営隊の隊長田原保二（技術少佐）は、美保基地に置かれていた山陰地方施設事務所長も兼任しており、回想の中では大社基地建設のことにも触れている（『海軍施設系技術官の記録』刊行委員会編1972、512頁）。また第3311設営隊が建設に参加していたことは、「第338設営隊戦時日誌（7月）」に記述があることから明らかである。第3311設営隊隊長・郷古雄三の回想によれば、「直江基地」の掩体の建設中に終戦を迎えたという（前掲『海軍施設系技術官の記録』608頁）。このように大社基地建設には舞鶴鎮守府で編成された多くの設営隊が投入されていた。

大社基地の建設に関しては、大社基地研究に先鞭をつけた陰山慶一『いま甦る山陰海軍航空隊大社基地』島根日日新聞社1996（以下「陰山1996」と呼ぶ）、榎原吉則『川の中の飛行場』私家版2012（以下「榎原2012」と呼ぶ）に詳しく、最近では高塚久司『島根県における空襲とその時代2020』私家版2020（以下「高塚2020」と呼ぶ）がアジア歴史資料センターの史料に基づいて実証的な研究を進めている。また大社基地に進出した部隊に関しては、若槻真治「大社基地に進出・駐在した部隊の概要」私家版2021（以下「若槻2021」と呼ぶ）が整理している（戦後史会議・松江HPで公開中）。

6 大社基地の概要については、いずれも敗戦時に進駐軍に対して提出した資料であるC08011074600「航空隊引渡目録5/14」、C08011096300「航空隊引渡目録14/14」、C08011425200「兵器需品引渡目録（追加）島根県」などによって知ることができる。例えば「兵器需品引渡目録（追加）島根県」には「滑走路」について「真砂土転圧仕上厚10cm 120m×1700m 内中央コンクリート舗装 平均厚10cm 60m×1500m」とある。

7 滑走路建設の作業状況については、上記の「第338設営隊戦時日誌」のほか、「陰山1996」、「榎原2012」、「高塚2020」に詳しい。また、美保基地予科練生の動員に関しては、当時の第十四期甲種予科練生などで作る蒼空の会が編集した『蒼空』1999などの回想からも知ることができる。

8 引き込み線に関しては「陰山1996」「榎原2012」でもその付設に関して触れられているほか、「航空隊引渡目録5/14」「兵器需品引渡目録（追加）島根県」などに添付された「詳細図」にも記されている。

9 『しらべる戦争遺跡の事典』柏書房2002、35頁参照。また佐用泰司・森茂『基地設営戦の全貌』鹿島建設技術研究所1953、9頁によれば、海軍が建設した飛行場は国内で122カ所あった。

10 姫路基地（鶴野飛行場）については加西市教育委員会『加西・鶴野飛行場跡（旧姫路海軍航空隊基地）』（加西市教育委員会HPで公開中）参照。

11 第762航空隊と攻撃第501飛行隊については、C13120379300「第七六二海軍航空隊美保派遣隊戦時日誌 自昭和二十年六月五日 至昭和二十年六月三十日」、C13120003300「第七六二海軍航空隊戦時日誌 自昭和二十年七月一日 至昭和二十年七月三十一日」、C13120003200「同 自昭和二十年八月一日 至

昭和二十年八月十五日」など参照。このほか「七六二空飛行機隊戦闘行動調書」「第七六二海軍航空隊戦闘詳報」などの資料が残る。このほか「陰山 1996」、「榎原 2012」、「高塚 2020」、「若槻 2021」参照。

<sup>12</sup> 「銀河」に関しては『日本海軍史第7巻』海軍歴史保存会 1995、『日本航空機総集第2巻』出版協同社 1959、『日本軍航空機総覧』新人物往来社 1994、木俣慈郎『高速爆撃機「銀河」』朝日ソノラマ文庫 1992 など参照。「銀河」は海軍爆撃機「一式陸攻」の後継機であり、アジア・太平洋戦争末期の最新鋭重爆撃機であった。また「銀河」の大社基地への配備に関しては「高塚 2020」14 頁参照。

なお、「航空隊引渡目録」や「兵器需品引渡目録（追加）島根県」によれば、敗戦時に大社基地で保有していた「銀河」は 42 機である。「航空隊引渡目録 1/14～14/14」によれば、その他の基地での「銀河」保有数は、松島基地 36 機、百里原基地 1 機、木更津基地 6 機、第一郡山基地 1 機、藤枝基地 1 機、豊橋基地 8 機、鈴鹿基地 1 機、姫路基地 1 機、鹿屋基地 1 機、第一国分基地 1 機である。14 冊の「航空隊引渡目録」に収録されているのは約 80 カ所の航空基地であり、敗戦時のすべての海軍航空基地の航空機保有数が判明するわけではないから今後の検討は必要だが、前掲木俣 1992 や「陰山 1996」「高塚 2020」などの見解も併せて考えると、東（第3 航空艦隊担当）は松島基地、西（第5 航空艦隊担当）は大社基地が「銀河」の拠点であったことはほぼ間違いないものと考えられる。また、『矢本町史第3巻』矢本町誌編纂委員会 1976 によれば、松島基地は7月14日以降5回の空襲を受けている。このことから考えると、敗戦時には大社基地が唯一であった可能性もある。

陸軍の場合、「銀河」に匹敵する重爆撃機は「飛龍」であるが、海軍資料に比べ、敗戦時の陸軍の航空機や航空基地に関する資料は皆無に等しく、実態を把握するのは困難である。伊沢保穂「「飛龍」の実践記録」、江島進「回想録「飛龍」とともに」（いずれも『世界の傑作機 No98』文林堂 2003）によれば、敗戦時の「飛龍」部隊の拠点は浜松航空基地や西筑波航空基地であったようであり、鈴鹿以西での拠点は知られていない。

<sup>13</sup> 「銀河」の出撃に関しては「高塚 2020」参照。高塚の研究によれば、少なくとも7月25日、8月7日、8月8日の3回、延べ22機が出撃した。「銀河」は雷撃も爆撃もできる爆撃機だったので、沖縄周辺に停泊していた米艦船を狙った魚雷や爆弾での攻撃が行われた。他の航空基地にも言えることだが、本土決戦が徐々に現実のものとなるにつれて航空機の出撃回数は減る。燃料が不足していたことと、本土決戦に備えて機数を確保するために待機していたからだと言われている。また、予想以上の整備不調の多発傾向や操縦熟練者の確保が困難であったことも、原因となった。

<sup>14</sup> 地下壕に関しては分布調査が行われていないために残存している実数や規模は不明であるが、「陰山 1996」や「榎原 2012」でも触れられているほか、島根考古学会員や戦後史会議・松江のメンバーが現地踏査をした知見も含めて記載した。また「兵器需品引渡目録（追加）島根県」などにも記載が残り、「隧道燃料庫」として「素掘木造幅 2.5m×高 2.5m 6 坑 230 延 m」、「同魚雷庫用」として「コンクリート」造幅 4m×高 3.5m 2 坑 56 延 m、素掘木造「コンクリート」併用 幅 2.5m×高 3m 5 坑 155 延 m、「同爆弾庫用」として「素掘木造及「コンクリート」併用 幅 3.3m×高 4m 3 坑 90 延 m」とある。また「航空隊引渡目録 5/14」には「別表 航空基地施設史実調査資料表」が収録されており、そこには「収容力其ノ他ノ主要施設」として「庁舎（未完成）600 平米（隧道式）」「工業所（未完成）240 平米外ニ隧道式 400 平米」「倉庫（未完成）2,400 平米（隧道式）」とある。このように大社基地では、実際に航空機が離着陸する一方で地下壕などの建設が続けられていた。建設工事と航空隊の運用が並行して行われたのも大社基地の特徴の一つである。

なおこうした地下壕（隧道）や掩体、誘導路建設などは、ほとんどが民有地で行われたが、1945年3月に「軍事特別措置法」が発令されることによって、私有地でも軍事的な必要があれば直ちに使用や収用が可能とされたため、地域住民は否応なく土地を海軍に提供することになった。また敗戦後は、原状を普及することなく、そのままの状態で放棄（返還）されたのである。

<sup>15</sup> 掩体の箇所数については、「兵器需品引渡目録（追加）島根県」で「掩体 転圧舗装 22 個 大型機用」などと記載されるほか、「航空隊引渡目録」などに添付された「詳細図」や、終戦後に米軍が撮影した空中写真などからこの場所がおおよそ特定できる。また上記「別表 航空基地施設史実調査資料表」には「飛行機終戦時 掩体（未完成）50 機」とされる。

<sup>16</sup> 誘導路については「兵器需品引渡目録（追加）島根県」で「転圧舗装一部厚 7.5 cm 板張舗装幅 15m」とあり、前注同様「航空隊引渡目録」などに添付された「詳細図」や、終戦後に米軍が撮影した空中写真などからこの場所がおおよそ確認できる。また上記「別表 航空基地施設史実調査資料表」には「運搬路 18,000 米（誘導路）」とあるが、この「18,000 米」が記載ミスなのか他の道路も含む数字なのかはわからない。

17 「航空隊引渡目録 5/14」には「施設物（兵舎及付属建物）」の一覧表が添付されている。それによれば「後谷」で士官舎 1、三角官舎 1、三角兵舎 2、「和西」で士官舎 1、普通兵舎 1、三角兵舎 8、「鷺谷」で普通兵舎 1、三角兵舎 1、「結」で W 工法 5、三角兵舎 1、「寺谷」で三角兵舎 3 が記載されている。このほか便所 3、煮水所 2、浴場 4、その他 6 の記載もある。なお「兵器需品引渡目録（追加）島根県」に収録された英文資料 C08011426200 ではさらに詳しい記載もあり今後の検討が必要である。

18 高角砲や対空機銃陣地については「航空隊引渡目録」などに添付された「詳細図」に記載される。それによれば出雲市大津に 1 カ所、主滑走路西側に 2 カ所、同東側に 4 カ所である。このうち主滑走路東側にある平野地区では工場建設に伴う発掘調査も行われ報告書も刊行された（『平野遺跡群発掘調査報告書 I』斐川町教育委員会 1983）。一部は工場建設によって消滅したが一部は残されている。また仏教山周辺にも防空陣地が置かれていた可能性がある。

19 「桜花」については第 338 設営隊の戦時日誌にその格納所の建設についての記載があるほか、「航空隊引渡目録 5/14」「同 14/14」「兵器需品引渡目録（追加）島根県」のいずれの目録にも、「主翼」や「尾翼」などに分解した状態で 50 機分を記載する。「桜花」は母機であった「一式陸攻」に懸吊して用いたが、「一式陸攻」の後継機であった「銀河」を母機とするように改良作業が進みつつあった。また「高塚 2020」15 頁では、「桜花」の専属部隊であった神雷部隊と大社基地の第 762 航空隊との関係が深かったことにも注目し、大社基地に「桜花」が置かれた背景を考察している。ただし「銀河」の改良が間に合わなかったこともあり、大社基地で「桜花」が実戦で用いられることはなかった。

20 「タコの足式」については前掲『基地設営戦の全貌』7 頁参照。同書によれば、平坦地に滑走路を置いて、格納庫や兵舎等をその周辺に置いた基地の在り方が、空襲の恐れから、「滑走路を中心にタコの足のようぐにゃぐにゃした飛行機運搬路並びにその各所に分散（間隔約 100 米）された飛行機置場が飛行場の主体となり（後略）」と言ったように変化したという。これはまずニューギニアやソロモンのような前線で用いられるようになり、その後本土にも転用されることになった。

21 航空基地の編年これまでは行われたことがないと思われるが、前注のような誘導路の形状の変化や、自然地形の利用形態、あるいは滑走路で用いられたコンクリートの質（ソイルセメント舗装、貧配合コンクリート舗装）、掩体でコンクリートが用いられたかどうかなど、整備や防備強化の観点からある程度は可能だと考えられる。今後の学術的な検討課題だと思われるが、建設時期から考えても大社基地はおそらく最末期に編年されると推測する。前掲『基地設営戦の全貌』、前掲『海軍施設系技術官の記録』参照。